

実践の記録を考える

角尾 和子

逞しさに驚いた話

昔の教え子I氏（フリーカメラマン）から聞いた話である。彼は小学生の頃からアフリカのトンブクトゥに憧れていたようで、最近の二十数年は日本とアフリカを往来して仕事をしている由。

先頃TVの仕事でセネガルからマリ・ニジェール・チャドへ、生きた山羊とミネラルウォーターをジープに積んでかけた時のこと。セネガルで

九歳くらいの子どもが「何でもするから、手伝わせてくれ」「お金はいらない、食うものだけ食わせてほしい」というので雇入れた。その子は洗濯をしたり、山羊を殺してその肉を捌いたり、身の回りの世話を全部やってくれていた。それがある日突然に、「今日でお別れだ」という。アフリカの中央部ニジェールへ着いたばかり。理由は「よいボスを見つけたから、自分はここで生活する」

という。ボスは砂漠の中に捨てられた車を拾って、ナイフや鍋を造ったりする人という。「あとには元気でいってくれ。身体に気をつけてな」の言葉を残して去っていった。残された大人たちは励まされたものの妙な気分であったという。

聞いた私はビックリして、改めてその子の年齢好などを聞き直し、自分の力で生きるその逞しさにすっかり驚嘆していろいろ考えさせられてしまった。

共生は理解に始まる

私達は、アフリカの各地について新聞・TVの報道で多くの情報を得ている。その情報が報道する人の恣意的な切りとりであったとしてもかなり広範なものである。しかし先の話に登場するような遅しく生活する子どもの事、そのような生き方を包含する彼の地の社会環境のことを、私は寡聞にして知らなかった。然しI氏が物語るとき、子

どもの姿を想像する。そして同じ地球上に生きている人間を実感する。

文明の機器は地球の裏側も映し出すし、宇宙へ飛行することもする。一方で文明が進んで困った問題も数多く指摘されている。進歩に役立てた資源は程無く枯渇するのではないかと危ぶまれて久しい。地球にすむ様々な生き方をする人々との共生こそが、世界を平和へ導くものであると思う。お互いの理解こそ、その第一歩であり、お互いの人間生活まるごとを理解しあう必要に迫られている。そのためには一人の人間を中心にする、情報のとり方や記録・報道の在り方が工夫される必要があるのではないだろうか。

実践を物語様式の記述で

私は、小学三年から六年までと、四歳の幼稚園児から小学六年まで、同じ人々を持ち上げる機会に恵まれたことがある。その体験の中にはあの子

この子の生活の物語がある。物語の経過を辿ると、そこには心躍るエピソードが満ちている。しかしそれらを記録に綴り残すことがためらわれて、今日にいたってしまった。医師のカルテに似た思い、否それより教育の営みは教師が中心という潜在的な信念がためらわせた。つまり子ども生活を中心に書き綴る意義を自分自身認めていなかったと今反省している。

学生と保育研究に取り組むとき、子どもの側からの記録が欲しいとつくづく思う。かねて『保育の体験と思索』⁽¹⁾に出会い、近頃『ウォーリーの物語』⁽²⁾を読んで、保育や、子どもの世界を、物語の様式で記述し省察する意義を今さらに感じている。

(川村学園女子大学)

〈註〉

- (1)津守真『保育の体験と思索』大日本図書
(2)ヴィヴィアン・ベイリー著、卜部千恵子訳『ウォーリーの物語』世織書房

